

# ポスター展示報告

戸張 雅登

シンポジウムの後、同じ建物の2階に設営されたポスター展示の会場では、立教大学経済学部の大山利男ゼミ、日本女子大学家政学部の葉袋奈美子ゼミと学生有志の活動、そして南池袋小学校の雑司が谷に関する取り組みが紹介されました。

農業経済学を専門とする大山ゼミ（ポスターは pp.35～36）では、フィールドワークを重視し、これまで農業体験や銀座ミツバチプロジェクトに参加するなどしてきました。2015年は、地元豊島区の在来品種である「雑司ヶ谷ナス」を研究テーマの一つに設定しました。雑司ヶ谷ナスは、江戸時代から大正時代にかけて雑司が谷地区一帯で盛んに栽培されていましたが、現在では練馬区にある6軒の農家でしか栽培されていません。しかし江戸東京野菜の一つとして、にわかに注目されるようになりました。雑司ヶ谷ナスは、硬い果皮と食感が特徴ですが、熱を加えるととても柔らかで独特の風味を楽しめます。

大山ゼミは、JA 東京あおばから雑司ヶ谷ナスの苗を譲り受け、2015年5月末から立教大学構内でプランター栽培をはじめました。収穫のタイミングが難しいのですが、移植して紫の花が咲いてからおおよそ20日後に最初の収穫を行いました。その後、雑司ヶ谷ナスの食味の特徴がわかるように、京都・賀茂ナスや一般的な千両ナスなどと食べくらべてみることにしました。生で食べたり、焼いたり、揚げたりして食べたところ、それぞれに特徴があることがよくわかったそうです。栽培体験は、その土地の歴史と文化を知る最適な試みであり、ゼミ生が雑司が谷について知るよい機会になったのではないのでしょうか。この取り組みは、豊島区の広報紙「広報としま」2015年9月1日号（特集版）で、ゼミ生が紙面制作した雑司ヶ谷ナスの特集として掲載されました。

日本女子大学家政学部住居学科（ポスターは pp.37～38）の学生有志は「わいわいぞうしがや」というグループを立ち上げ、2012年以降、雑司が谷のまちづくりに取り組んできました。まち歩きをして、まち並みや住居を観察、記録し、住民にインタビューをすることで、地域を知り、その成果として、まち歩きで撮影した写真を集めた地図『雑司が谷いここまっぷ』（2012年）や、御会式連合会に所属する各講社の特色をまとめたガイドブック『雑司ヶ谷の御会式知恵袋』（2013年）、商店街への取材を基にした冊子『よりみちずかん』（2014年）を作成、配布してきました（豊島区「まちづくりバンク」の活動助成による活動）。

また、別の住居学科学生グループにより2012年から刊行が続いている冊子『ぞうしガヤガヤたんけん』は、旧雑司が谷全域を取り上げています。現在、雑司が谷は3丁目までですが、1966年より前は7丁目まであったそうで、池袋駅南口のホテル・メトロポリタン

ラザ界限まで含まれたそうです。冊子には、ゼミ生がまち歩きをして気に入った場所が取り上げられています。学生の視点でまとめられた雑司が谷の情報は、地域住民にとっても新鮮だったのではないのでしょうか。こうした取り組みは、学生有志によってはじめられ、指導教員の葉袋氏が学生の自発的な学びを促してきたことが窺えます。(冊子の印刷は、日本女子大学総合研究所の研究活動として2012年から2015年まで取り組んできた「大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み」、2016年からの「日本女子大学における学生を主体とした地域連携活動の活性化のための調査・研究」の一環として行われています。)

葉袋ゼミの研究には、「雑司ヶ谷研究2—御会式開催支援における人の繋がり—」(奥井・葉袋、『日本女子大学紀要 家政学部』第59号、2012年)や「雑司ヶ谷研究5—近隣交流を促す境界領域—」(泉水・葉袋、『日本女子大学紀要 家政学部』第61号、2014年)などがあります。災害時における共助や、個人商店の利用、新住民の受け入れ、子どもの遊び場としての生活道路、道路整備の日常生活への影響など、住居学の観点から地域住民の交流や生活空間を調査、考察し、まちづくりの提案をしてきました。一方的に調査するのではなく、その研究成果を地域に還元することが大事だと、当日開催されたシンポジウムの中で葉袋氏は述べていました。

設計演習の授業で提案した住宅の青写真を、地域に住む方々に見せて評価してもらうこともあり、大学での学びをいかに地域貢献につなげるか、葉袋氏は考えてきました。授業や自主的な冊子製作やまちづくり活動、さらに研究として地域に関わる葉袋ゼミの学生は御会式の準備の見学、社会福祉法人「みどりのこみちの会」による雑司ヶ谷霊園の緑育成活動への協力、雑司が谷で子育て中の母親たちが結成した市民団体「Hariti」(サンスクリット語で「鬼子母神」)の活動や町内会や商店街のイベントなどへの参加、協力を通して、地域とのつながりを深めてきました。

南池袋小学校(以下、みないけ小)は「すすきみみずく」の制作を通して、地域住民との交流に取り組んできました(ポスター展示風景は pp.39~41)。江戸時代から伝わる雑司が谷鬼子母神の土産物「すすきみみずく」の作り方は、地域の保存会が継承し、子どもたちに伝えてきました。みないけ小の4年生は制作に入る前に、保存会による紙芝居や保存会とのQ&Aという事前学習を踏まえ、制作後には、海外の児童に「すすきみみずく」の作り方を英語で教えます。

展示会場では子どもたちが「すすきみみずく」を制作する様子を収めた写真や、子どもたちから保存会へのお礼の手紙が展示されていました。加えて、ユネスコ未来遺産登録1周年と、雑司が谷のケヤキ並木が東京都指定天然記念物に指定されたことを祝う植樹祭(2015年)で読まれた大内響さん(当時5年生)の作文や、「みないけ お祭りたんけん隊」(3年生)、江戸提灯作りといった体験学習の様子を伝える展示もありました。お祭り探検隊は、宮司へのインタビューや祭りの準備の見学を通して学んだことを、地域住民にフィードバックするだけでなく、外国の方にも伝えていきます。そこからは、地域の文化を

自分たちの文化として捉え、外に発信していく姿勢が見てとれます。

みないけ小の子どもたちは、法明寺の近江住職から御会式について学ぶそうです。御会式とは日蓮上人を弔う行事で、雑司が谷では10月16日から3日間、参加者は講社と呼ばれる集団の一員となり、講社ごとに特徴のある纏を振りながら、まちを練り歩きます。本来、御会式は日蓮上人が祀られた法明寺安国堂に参拝するものですが、雑司が谷では鬼子母神への信仰が深く根付いています。

御会式を学んだ子どもたちは、他校に地元講社の纏を披露してきました。自分たちの文化を通して、ほかの地域の文化を尊重する態度も育つものだと、当日開催されたシンポジウムの中で、中村校長は述べていました。地域の伝統文化と自然環境は人づくりの基盤であり、その学習に重点を置いています。

大山ゼミや、葉袋ゼミと日本女子大学の学生有志、そして南池袋小学校の取り組みから見えてきたのは、学校という空間を地域文化から切り離さない姿勢です。私たちは学内で過ごすうちに、地域性を忘れてしまいがちです。しかし、学びの場とは学内に限られたものではなく、地域の景観や農作物、地域で暮らす人々の談話や取り組みから学ぶべきことも多くあります。それらを保存、整理し、発信していくことは、教育機関の重要な役割だといえるでしょう。

(とばり・まさと 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士課程後期課程)